

2021

6

令和3年6月10日発行（毎月1回10日発行） 通巻334号

人生100年時代 共生社会の生き方情報誌

# とあそぼう



さわやか福祉財団

コロナ禍を乗り越えて、  
地域共生社会実現に向け、一緒に前に進みましょう！

# いきがい・助け合い サミット in 神奈川

参加お申し込み受付中

開催 2021年 9月1日(水)・2日(木)

場所 パシフィコ横浜  
(横浜市西区みなとみらい1-1-1)

開催形式 会場参加、ライブ配信併用  
会場参加 1500名  
オンライン視聴 3500名

※新型コロナウイルス感染症の状況により、全面オンライン配信とする場合があります。



主な内容

- 全体シンポジウム
- 分科会：第1部から第3部まで34分科会 ※現時点での予定です
- ポスターセッション ● 全体発表会 ● 大交流会 など

主な対象

生活支援コーディネーター、協議体構成員、地方自治体、社会福祉協議会、地域包括支援センター等の地域づくり関係者、国、関係機関、NPO・民間団体の関係者等、助け合い・支え合う地域づくりに関係する方、その他関心を持つ一般住民 など

参加費

資料代 2,000円／1人 (会場参加、オンライン視聴とも)  
大交流会 別途 3,000円／1人

ポスターセッション出展受付中

コロナ禍における助け合い活動、地域共生の活動など、  
いきがい・助け合い活動に関する取り組みを  
ポスターにしてご紹介ください。

ご応募を  
お待ちしております！

※応募詳細は財団ホームページ、  
または下記電話番号で「ポスターセッション担当」までお問い合わせください。

お問い合わせ 電話：(03) 5470-7751 (担当・内田)

◎開催情報は、財団ホームページでもご案内しています

▶ <https://www.sawayakazaidan.or.jp>

# とあ言おう

2021年6月号

## CONTENTS

### 2 新しいふれあい社会 実現への道

## 70歳定年で社会は変わるか？

清水 肇子

### 4 連載 今風女子101歳

## 出会いを重ね、茶道を通して 学び、教え続ける101年の軌跡

北風 宗照さん

### 10 さわやか福祉財団の軌跡 真っ直ぐに、30年

## 寄稿3 異彩・異才の個性派ぞろい

理念の実現に向けて集まった熱い心を持った人たち

さわやか福祉財団理事 鶴山 芳子

### 18 広げよう つなげよう 地域助け合い 活動の現場から

## 改修工事から有償ボランティアへ 元気なうちは互いに助け合う

西武狭山グリーンヒルおたすけ隊 (埼玉県入間市)

### 25 移住 悪くないですよ 第7回

## 心許せる仲間たちとの日々 新地 章倫さん (長野県佐久市)

### 30 「地域助け合い基金」 助成先のご紹介 / 状況のご報告

### 36 連載 5 老いの暮らしを創る

## 早めの引っ越し② 福祉ジャーナリスト 村田 幸子

### 新しいふれあい社会づくりに向けて

● 新地域支援事業・  
助け合いの地域づくり

40 北から南から 各地の動き

● その他の財団の活動 など

43 ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー (賛助会員)・ご寄付者の皆様のご紹介

45 さわやか活動日記 (抄)

㊦「基金」ご寄付のご案内 / ㊦「NEXT」動画のご紹介

㊦助け合い大全 '19のご紹介 / ㊦みんなの広場 / 投稿募集

㊦さわやかパートナー・『さあ、言おう』のご案内 / 表紙絵から

助け合いを広げよう / 新・ひとりごと・高橋 公

# 70歳定年で社会は変わるか？

さわやか福祉財団 理事長 清水 肇子

この4月から、企業は70歳まで従業員が働ける環境づくりを課せられることとなった。努力義務だが、従来の65歳までの雇用確保からさらに一段上がり、「70歳」が目指すキーワードとなる。

現代では60代は働き盛り。まだ家族を支えなければいけない状況もあるかもしれない。労働力不足が大きな問題となる中で、企業にとっても、働く意思を持つ個人にとっても、選択肢の機会が広がることはよいことだが、他方、年金や医療、介護などの社会保障費の財政悪化を食い止めたい国の思惑も強く見受けられる。年金の受給年齢が同様に段階的に引き上げられるなど、「働かされる」だけの環境づくりにはしなないか。また、コロナ禍の今、多くの企業が経営悪化に苦しんでいる。とても定年延長で人材を抱え続ける余力はなく、早期退職を募って人件費削減を図るという切実な声も聞こえている。

それでも、人生100年時代のこれからの考えたとき、年齢に関係なく、本人の意思と状況に応じた働き方ができる環境づくりは不可欠といえる。ただその際、共に考えるべき問題は、

シニア世代になっても、社会との関わりを働かぬか働かないかの二択しかない環境のまままでよいのか、ということだ。

70歳定年制で、従来のような「会社人間」の寿命が5年増えたとしよう。果たしてそれでの後の健康的ないきがある人生につながるだろうか。「社会人間」になれるきっかけをどんなに失い、せつかく持っている能力も生かせないままに、漠然と毎日を過ごすのはむなし。定年退職後、まさにやりがいを使い、心の不調を訴える人たちがますます増えているという。いわゆる「定年うつ」と言われる症状で、当事者にとっては何ともつらいことだろう。特に地域に関わりづらいつまわられている男性にとっては深刻な問題だ。

「新しい人間関係での環境が面倒というより、正直なところ、何となくこわいという気持ちがある」。地域デビューについて、定年退職した男性に聞いた言葉だ。「こわいんですか?」。驚いて思わず聞き返した。それまでの自分の基準がまったく通用しないような環境に二の足を踏んでしまうという。「もっと若い頃から、地域の活動経験が少しでもあれば違っただろうけど」と。なるほどと思えた。

70歳は一般にまだまだ元気であり、社会にいくらでも力を生かせる。しかし、新しい環境に踏み出すには、通常は年齢が上がるほど億劫になり、ブレーキを踏みやすい。今の若い世代は案外仕事とオフタイム、地域活動のつながりも自然に楽しんでいる。70歳定年が謳われる時代だからこそ、併せて、現役のときから地域に関わる自分なりの足がかりを何か見つけておきたい。それこそが人生100年の目指す社会スタイルではないだろうか。

# 今風女子101歳

## 出会いを重ね、茶道を通して 学び、教え続ける101年の軌跡

北風 宗照さん

101歳の今も、裏千家の名誉師範として多くの弟子に慕われ、毎日のように指導にあたる北風宗照さん。両親とも教師という家庭に育ち、友だちより先生と話すほうが楽しいという大人びた少女だった。お茶との出会いは女学校時代。「学び」と「教え」に彩られた人生を柔らかな京都弁で語ってくれた。

(聞き手／宮下 公美子)



### 同級生より先生と親しむ大人びた少女

友だちと遊ぶより、1人で本を読んでいるほうが好き。両親が共に教師を務める家庭で大正9年に生まれた北風さんは、そんな少女だった。6人

きょうだいの2番目で、小学校の頃には、すでに家を出ていた姉に代わって長女役を担っていた。弟を背負って買い物に行くなど、3人の弟たちの子守と家事の手伝いで忙しい毎日だった。

「2度転校していることもあって、小学校の頃、友だちと遊んだ記憶がないのです。仲の良かった

友だちも特に思い浮かばないですね」と、北風さん。

小学校を卒業し、女学校に進んでからも、1人で過ごすことが多かった。読書家で、特にヘルマン・ヘッセが好きだった。

その頃の北風さんは、齒に衣を着せず、ズバズバとものを言うタイプ。周囲からは好かれていなかったし、同級生より先生と話すほうが楽しかったと当時を振り返る。

「英語の先生がたまたま近所に住んでおられたので、しょっちゅう遊びに行っていたのです。それで仲良くなって、9歳も年上でしたが、先生が亡くなるまで59年間、一番の親友でした」



奈良女子高等師範学校卒業時の北風さん

北風さんが懐かしそうに語るこの先生は、当財団の会長堀田力の母、堀田四奈さんである。

女学校時代にはもう1人、北風さんが「生涯の恩人」と語る先生がいる。短歌をはじめ、文学についてさまざまに語り合い、意見を交わした国語の先生である。北風さんが女学校を出て、奈良女子高等師範学校（以下、女高師）に進学してからも交流は続いた。岡山に転勤していた先生からは、一度こちらに遊びに来ないか、と声をかけられた。しかし、学費の負担をかけている親にこの上、岡山に行く旅費を出してほしいとはとても言い出せなかった。すると、先生はそれを察して、夏休みの前に旅費を送ってきてくれた。

「話がしたいから、このお金で岡山においで、と。その手紙を読んで、私は泣きました。6人きょうだいの2番目の女の子なんて、誰も見てくれない。自分は誰からも良く思われていないと思っていたのに、こんなふうに言ってくださる人がこの世の中にいるのだと気がついて。その頃から、人生がバツと明るくなったように思います」と、

北風さんはしみじみと語る。

実は、女学校時代にこの国語の先生の家で見つけた岡倉天心の『茶の本』こそが、北風さんとお茶との最初の出合いだった。当時、お茶やお花は、女学校を卒業した女性が花嫁修業としてたしなむものだった。

「だから私は、お茶やお花をちよつとばかりにしています。ところが、『茶の本』を読むと、お茶はそんなものではない。日本独特の文化だとわかったのです。奈良の女高師に行ったら、寮にお茶の先生が来てくださっていたのですぐに稽古を始め、すっかり気に入ってしまいました」

卒業後、広島で国語の教師となってからも、北風さんは熱心にお茶に取り組んだ。生活が厳しく統制されていた戦時中は、週2回のお茶の稽古だけが楽しみだった。

## 人生最大の幸せとなった 夫・清一さんとの出会い

両親も姉も教師という家庭で育った北風さんは、

迷うことなく教職の道に進んだ。女性が職業を持つことが珍しかった昭和10年代である。自立した女性の先駆けとも言えるが、女高師を卒業して就いた国語教師の仕事を、北風さんはほどなく手放している。国語や教師の仕事が嫌だったのではない。国語という教科の「教えにくさ」に閉口したのである。

「国語は、できる子は先生の言うことぐらいわかっていきますし、できない子はいくら教えてもなかなかわからないものです。正規の教員は2年半で辞めてしまいました」

この決断は、結婚という人生の大きな節目と重なったことで下された。

夫となった故・清一さんとの出会いは、女高師3年の19歳のとき。夏休み、京都市内の小学生が集まる臨海学舎に、北風さんは引率者として、東京文理科大学（現在の筑波大学）の学生だった清一さんは先生役として滞在し、知り合う。このとき結ばれた縁をその後も取り持つ友人があり、23歳で結婚。当時には珍しい恋愛結婚だった。

叱られながらのお点前で、  
学ぶ楽しさを再発見

女高師時代から習い始めたお茶は、結婚後、一

度もなく、結婚以来60年間で、一度もけんかをしたことがありませんでした」  
そんなパートナーを得たことで、北風さんはその後も、心が向かう方向を遮られることなく進んでいく。子育てが一段落してからの非常勤での教職への復帰、そして、お茶の道である。



北風さんの古稀記念祝会で、夫・清一さんと

「人生を振り返って一番の幸せは、主人と出会えたことです。本当にいい人で、私がすることに口を出すことは一

時中断。その後、女高師時代に指導を受けていた先生が近所にいるとわかり、再び習い始めた。しかし、北風さんはなかなか稽古に身が入らない。基本的な手順を繰り返すだけのお茶の稽古を、面白いと思えなかったのである。それが変わったのは、「奥伝」にたどり着い

弟子たちとのアルプス旅行

北風さんは65歳から88歳までほぼ毎年、弟子たちとアルプスを中心にヨーロッパ旅行に出かけていた。簡易な茶釜を持参して開いたお茶席には、たくさんの現地住民が訪れた。ときには、犬がお客の席に着いたことも。また、現地の知人の紹介で、北風さんが大好きなヘルマン・ヘッセの息子さんと会食する機会を得たこともあった。



犬も訪れ、お茶を楽しんだ茶席

てからだ。突然、お茶の面白さに気づき、以来、ずつと惹きつけられている。

「お茶とは、ただお点前を、手続きを習うだけのものです。全く同じ所作を繰り返すのですが、不思議なことに、教える先生の持っているものから伝わってきます。ですから、お茶は先生に「よります」

お茶やお花、日本舞踊など日本の芸の道は、西洋風の「レッスン」と違い、正しいやり方を一から教えたりはしない。まずは見よう見まねでやらせて、悪いところを指摘する。なぜ悪いのか、理由を事細かに説明することもしない。学ぶ者が自分自身で気づき、悟ることに意味があるからだ。

北風さん自身、それを身をもって知ったのは、習っていた先生が亡くなり、家元のもとに通うようになったときだった。家元の名代として指導する先生方の厳しい指導を受けて、目を開かされた。「最初の頃は、お点前の始めから終わりまで叱られっぱなしでした。それはもう、怖かったですよ。でも私は、叱られて、叱られて、お点前をするの

がとても面白かったのです」

学校を卒業し、仕事を辞めて主婦業に専念していた北風さんは、学ぶことから長く遠ざかっていた。このとき再び機会を得て、新しいことを学び、身につける楽しさ、面白さをあらためて噛みしめていたのである。

指導を受けると、その日叱られたことを簡条書きにしてノートに書き付け、読み返した。それはノート2ページに及ぶこともあった。

### お茶と出合って80年経っても 明日、稽古ならうれしい

お茶の指導を始めたのは、48歳のとき。周囲から教えを乞われ、あつという間に生徒が集まった子どもから自分の親世代まで、幅広い年齢の生徒が北風さんを慕い、通ってくるようになった。101歳となった今も、北風さんはほぼ毎日、お茶の指導を行っている。

お茶は形から入る、「非日常」の芸道だ。お点前のときにしか使わない特別な道具を使い、その

道具を決められた通りの場所に置き、決められた手順で扱う。

「一分一厘違わず同じ所作をするのに、なぜか一人ひとり、そこに異なる個性が表われます。それが面白いのです」

茶道具、茶菓子、掛け軸、床の花やお香、そして人。お茶席ではさまざまな出会いがある。そのときごとに違う出会いの中で、それぞれが自分なりの気づき、学びを得ていく。

「指導者になって心がけたのは、できるだけお弟子さんたちに自分で考えさせ、気づかせるようにすることです。そして、必ず誰にも公平に接することですね」と北風さん。

裏千家の名誉師範ながら、北風さんは今も月に3回、家元のもとで指導を受けている。「お茶は一生、お稽古です」と北風さんが言うように、お茶の学び

### 1年遅れの百寿を祝う会

昨年100歳になられた大正9年生まれの北風さん。コロナ禍で祝う会を1年延期したものの、当日の京都は、折悪しくまん延防止等重点措置の初日となった。万全の感染防止策を取り、5回に分けて祝う会を開催。主賓である北風さん自らがお点前を披露したことに、多くの祝賀客が「初めて先生のお点前を間近で拝見した」と感激した。

今回の取材では、弟子、孫弟子の方々にご尽力いただき、北風さんが今も多くの方々とつながりを持ちながら日々を過ごしていることがあらためて感じられた。



100歳を祝う会で、お点前を披露する北風さん（左）と、娘の安井温子（はるこ）さん

は、どれだけ回を重ねても尽きることがない。

101歳となった今、生きがいは何かと尋ねてみた。すると、間髪入れず「お茶を学び、教えることです」という答えが返ってきた。

「いつでも、明日お稽古をできるならうれしい、と思います」

そう語る北風さんの日々は、常に新しい出会いと学びに満ちている。

真っ直ぐに、30年

寄稿3

# 異彩・異才の個性派ぞろい

理念の実現に向けて集まった  
熱い心を持った人たち

さわやか福祉財団理事 鶴山 芳子

今秋30周年を迎えるさわやか福祉財団の軌跡を、人を中心にしながらご紹介するシリーズの第3回です。活動を始めた創設時から、「さわやか」に飛び込んできた初期メンバーを通じて、当時の取り組みを振り返ります。

(編集部)



1994年、五反田の事務所にて

時代の先を見ながら  
常に住民の立場で推進

30年間ブレることなく、住民主体による共生

社会の実現に向けて取り組みを進めてきたことをあらためて実感します。介護保険法もNPO法もまだなかった当時、少子高齢化や核家族化が進む中、地方では助け合うのは当たり前でし

たが、しがらみが強く、また、都市部ではあいさつすらしないけれど、煩わしさが無い分ホッとすると、そんな時代でした。さわやか福祉財団の理念である「新しいふれあい社会」の「新しい」は「個性やプライバシーを尊重する」ということ。その上で誰もが自分を生かしながら、ふれあい助け合うあたたかい社会をつくるという旗印を掲げ、行政だけでなく市民みんなで参加して取り組んでいこうという呼びかけは、先駆的で時代の流れに沿ったものであり、多くの人や組織の共感や参加をいただきました。そして、我々スタッフは住民の立場で考え、事業の推進や提言をすることが当初からの変わらぬ特長と言えます。

### お金はないけど志は高くフラットな運営

私が参加した1994年は任意団体として3年目の時期で、財団法人化に向けて準備に取り組まかろうとしていました。3つ目の事務所であ

る品川区五反田の事務所で、「はい、さわやか準備財団です」と電話対応する明るい声が響きます。スタッフは10名ほど、初めて事務所に行ったときは、みんないきいきと輝いているなあという印象でした。この当時の財団法人は、明治以来100年以上続いてきた古い法律によるもので、官庁主導がほとんどです。一介の市民団体から財団になるのは非常にハードルが高く、何よりも許可を得るためには億を超える基金が必要でした。それだけでなくもお金のない中、「『さあ、言おう』の発送は糊を水で薄め、ハケで伸ばして付けて封をする」「月末の支払いはいくつかの口座にあるお金をかき集めて支払う」など、皆で常に節約を心がけながら、慌ただしい中にも熱い気持ちとやりがいを持ち事業に取り組んでいました。狭い会議室のスペースに、堀田さん（現会長）や清水さん（現理事長）を含めて5〜6名が、「密」になって顔を突き合わせながら侃々諤々議論をし、それぞれが主体性を持ち連携しながら進めるといふ、まさに

市民活動そのものでした。

スタッフは企業からの出向者、プロパー、パート、嘱託、企業を退職したボランティアなど多様な人たちです。肩書や年齢なども関係なく、時に言い争ったり、すぐに仲良くみんなまで研修会の資料を作ったり。こうした個性派ぞろいの組織を初代事務局長として率いていたのが、五十嵐純さんでした。

### 大企業から市民団体へ。 組織の強力な基盤づくり

五十嵐さんは、東京海上火災保険株式会社（現東京海上日動火災保険株式会社）で長年にわたり大変活躍されていた方です。92年、定年を前に自ら会社に交渉して市民団体への出向による人材支援という道を切り拓いてくれました。その後、富士通、日立製作所、新日本製鐵（現日本製鉄）、伊藤忠商事等々、日本を代表する企業からの人材出向支援が続くことになり

ますが、こうして多くの企業に共感をいただけたのも、五十嵐さんご自身の転身が大きな影響を与えてくれたことと思います。

五十嵐さんは事務局長として、理念や事業の理解を市民、企業や行政に広げながら、企業時代のネットワークを生かして、財団法人化に向けた資金集めに奔走してくれました。他の企業出向者や企業OBボランティアの方と共に積極的に働きかけ、約70に上る企業や団体、労働組



初代事務局長の五十嵐純さん(左)。隣は堀田会長

合、そして、およそ300人の個人から賛同を得ることができ、95年4月に、財団法人として新たなスタートを切るようになります。

「堀田さんは、おしゃれな工夫を」と言う。

もちろんお金をかけないというのが大前提で、努力でカバーできないスタッフはいつも頭を悩ませていた」と語っていた五十嵐さん。その当時の財団の様子と五十嵐さんの堀田さんへの想いを感じます。五十嵐さんの後輩でもある蒲田尚史さん（96年より東京海上から出向、現在もボランティアとして参加）曰く、「五十嵐さんは『堀田さん命』の人。私は理念に賛同しているけど、上司としての堀田さんは厳しい（笑）」と、五十嵐さんとの思い出を語ってくれました。事務局長として約4年、さわやかかの今に至る法人の礎を築いてくれた五十嵐さんでしたが、もともと病を抱えていました。それでも、きちんと仕事をしたい性分で、夜遅くまでの資料作りにも一緒に参加してくれたり、体を休めたいと皆で訴えても、休んでくれません。次

第に入退院を繰り返しながらも、自分でできることを最大限やっておきたい、そんな思いで過ごされていたのかもしれませんが、60歳を迎えた夏、入院先の病院で静かに旅立たれました。病床でも最後まで、さわやかな活動を考えてくれた五十嵐さん。今も、当時と変わらずに慌ただしく取り組んでいる私たちを、天国から応援してくれていることと思います。

### 助け合い活動を全国に広める組織づくり

任意団体として、最初に取り組んだのは「ふれあい切符」（当時はボランティア切符）の推進とネットワーク化への働きかけでした。「困ったときはお互いさま」が原点であり、あなたかい住み心地の良い社会にするには住民同士の助け合いが不可欠で、92年に「ふれあい切符研究会」（ボランティア切符研究会から改題）を主宰し、幅広いボランティア活動への呼び水として積極的に提唱しました。

ふれあい切符制度とは、ボランティア活動をした時間を預託しておき、将来自分や家族等が必要になったときに、その預託した時間の支援を受けられるというものです。介護への不安が高まる中で人々の心を捉え、広がりました。時間預託、点数預託、タイムストックなど、各団体により名称や形態が違いましたが、当財団では総称して「ふれあい切符」と呼び普及啓発活動を進めました。当財団の活動の中核である助け合い活動推進の基となる研究であり、この後、具体的に全国への助け合い団体設立・運営支援を強力に進めていきます。こうした組織づくり支援の活動をゼロから強力にリードしていったのが、事務局次長も兼務していた奈良環さんです。

### 実践者と共に有償ボランティアの推進

奈良さんは92年から参加。編集の経験があり、取材、調査研究をはじめ、持ち前の粘り強さを

発揮して、以後財団が進めるさまざまな重要な活動のリーダーとしても、大車輪の活躍でさわかきの事業を進めてくれました。後年、介護保険制度の創設など国への政策提言や、勤労者の社会参加を進める事業の推進などの難しい課題も柱となって担ってくれました。

創立当時、財団では、「在宅で高齢者などを支える組織づくり」「ボランティア活動参加の促進と担い手づくり」「情報誌発行」を事業の3本柱と定めて、在宅を支える組織を5000団体、企業・学生合わせて担い手となるボランティア参加1200万人、という目標のスローガンを掲げて、働きかけを始めました。具体的な数をわかりやすく掲げましたが、つまりは将来に向けて、全国津々浦々どこでも助け合いがある、そんな地域を皆でつくる、というものです。まさに今、財団が進めている住民主体の助け合いの地域づくりにつながるものです。まず、有償ボランティアによる助け合いの普及に力を入れるため、93年から、主に草の根型



リーダー研修会での奈良環さん(左)と、「『在宅福祉サービス』団体新設・運営マニュアル」

の「『在宅福祉サービス』団体新設・運営マニュアル」を作成しました。これを基に93年には全国で6か所、94年には全国5か所と、以後も全国で続々とリーダー研修会を開催していくこ

とになります。マニュアルはバインダー形式で300ページ以上。その作成を奈良さんが担当し、実践者と共に徹夜の作業も経て完成しました。実践に基づくノウハウや立ち上げに必要な書式類なども充実し、このマニュアルと研修で多くの組織が立ち上がりました。

当初の研修会は、各地で熱い思いを持った人たちが集まる2泊3日型で、朝から晩までホテルに缶詰めで具体的に学び合うというもの。開催前になると奈良さんが「死のロードが始まる」と笑いながら、気合の雄叫び(?)を上げていたことを思い出します。

この研修会の取り組みを奈良さんと共に推進したのが、石井利枝(現姓川崎)さんです。石井さんは持ち前の明るさと親しみやすさで、参加する地域の皆さんとすぐにつながる特性を生かしながら全国を回りました。



石井利枝さん

た。この2年間だけでも50を超える有償ボランティア団体が立ち上がっています。

団体の新設はおよそ半年〜1年ほどかかることが多く、地域の人間関係の濃さなど助け合いの実情も違うため、それぞれに合った情報提供が必要です。そういった助言者の役割を担う人材として、93年からはインストラクター養成のための研修会を併せて行い、95年に第1期さわかインストラクター8名が誕生しました。その後もインストラクターの皆さんと共に実践に基づいた組織づくりの研修会やインストラクターの養成研修会を各地で開催し、助け合い活動を始めようという「心に火を付ける」役割を果たしました。97年からはさらにきめ細かに地域の実情に合った研修会をと、全国の市町村で1日型研修会が始まります。組織づくり支援グループに木原勇さんが参加し、石井さんと共にリーダーを務め、全国のさわかインストラクターと共に有償ボランティア、移動支援をはじめ、居場所、近隣助け合いなど地域の実情に合った

住民主体の活動を精力的に働きかけました。

### 企業・学生も地域でボランティア参加を

当財団では設立当初から企業や学校に働きかけ、社会人や退職者、学生・生徒のボランティア参加を推進してきました。このうち、主に子どもなど青少年を対象とした事業のリーダーとなったのが、有馬正史さんです。

93年11月、「ボランティア活動評価・表彰研究会」を開催。研究会の会長には、慶應義塾大学名誉教授（当時）の石川忠雄さんにご就任いただきました。他に、関係省庁担当者、有識者等およそ20人をメンバーに、入試や企業の採用試験、人事考課等にボランティア活動の実績を評価して加え、あるいは表彰していくあり方を探りました。95年、その報告を松岡紀雄さん（当時・神奈川大学教授）らと「『ボランティアの世紀』を迎えるために」として発表します。来たる21世紀を「ボランティアの世紀」と呼ば

うと提唱。児童・生徒には「人格の向上のために、知育中心のこれまでの教育に社会体験学習を取り入れていくべき」と、ボランティア体験学習の拡充を提言しました。

その後、詰り込み教育の大きな方向転換として、98年の学習指導要領の改訂に伴い、「総合的な学習の時間」が導入されましたが、国は「教育再生会議」を組織して知識重視の揺り戻しを行います。そこで財団では、堀田さんと、小山内美江子さん、牟田悌三さん、元文部省の嶋野道弘さんと共に、



写真左から、蒲田尚史さん、有馬正史さん。右端が木原勇さん。

06年に「教育再生民間会議」を急ぎよ立ち上げて強力で反対の提言を行いました。これらの事業を担当していた有馬さんは、真面目で心優しい薩摩隼人。その後も、「ふれあいボランティアパスポート」の仕組みづくりや、教師を対象にした「スクールボランティアサミット」等、財団が進める学校も巻き込んだボランティア活動の推進を情熱をもって牽引してくれました。

今、国は地域共生社会づくりを目指していますが、小さい頃から地域の高齢者などとふれあうことは非常に大切です。子どもたちの「生きる力」を育み、自助・共助を身に付けられるような環境づくりが不可欠な現代、総合学習が目指してきた方向が、あらためて問われています。

当財団では現在、子どもたちの「共感力の育成」を目的とした研究会や、学生・生徒のボランティア活動の評価を進める研究会を立ち上げ、新たな提言に向けた活動を行っています。30年前と変わらぬ理念で、これまでの事業も生かしながら、新しい取り組みをさらに進めていきます。



# 改修工事から有償ボランティアへ 元気なうちは互いに助け合おう

西武狭山グリーンヒルおたすけ隊（埼玉県入間市）

「困ったときはお互いさま」の精神でゆるやかにつながり、自分たちの手で安心・安全をつくり出す取り組みは、住民自身のやりがい、いきがいにもつながります。高齢化の進行した団地において、居住者同士の生活支援を展開している「西武狭山グリーンヒルおたすけ隊」は、改修工事をきっかけに活動を開始。住民それぞれの得意を生かした各部隊がいきいきと活躍しています。

（取材・文／城石 眞紀子）

ドア・サッシの改修工事で  
わかった居住者の高齢化

埼玉県南西部に位置し、日本三大

茶の「狭山茶」の主産地として知られ、あり、緑や田園風景に囲まれた豊かな入間市。都心からは約40キロで、西 自然が広がる。この地に建つ西武狭山グリーンヒル武鉄道を利用すれば1本で池袋まで行くことができる東京のベッドタウンでは、1974年に入居が開始された18

棟550戸からなる、5階建ての団地型分譲集合住宅だ。住民は約1100人で高齢化率は約50%。同市全体の高齢化率29・6%と比べて、突出して高い水準にある。そのうち、市の敬老祝金等の支給対象となる77歳以上は300人以上、70歳以上の独居者も80人を



18棟550戸からなる西武狭山グリーンヒル

超えている。

団地内の自治会の加入率は85%と高く、共同スペースの日常管理や定期メンテナンス、修繕などの管理業務も管理組合をつくって住人自らの手で行い、何か検討事項が生じたときには、自治会・管理組合傘下のライフプラン推進機構にその問題に特化した組織が立ち上がり、課題の解決にあたる仕組みを構築している。

西武狭山グリーンヒルおたすけ隊（GHおたすけ隊）は、このライフプラン推進機構の一組織として、2015年9月に発足した。

「きっかけは、前年の14年に全戸を対象に行ったドア・サッシの改修工事でした。これに伴って居住者の中からボランティアが募集され、家具の移動などを担当。家の中に入るので家族構成などがわかり、住民が高齢化して独居世帯も増えているなど、世代交代が大



活動の拠点の集会所

きく進んでいることがわかりました。

同時に、家具の移動の際に、ついでのカーテンを外して洗濯してほしいとか、部屋の模様替えをしてほしいなど、さまざまな要望もあつたんですね。ドア・サッシの改修工事は1年ほどかかり終了後にボランティア組織は解散したのですが、こうした実態から、今後は

生活全般の手助けが必要なのでは、と  
 の声が上がりました。そこで、このと  
 きに関わったボランティア42名がその  
 ままGHおたすけ隊のメンバーとなっ  
 て、活動が立ち上がりました」と設立  
 の経緯について話してくれたのは、隊  
 長を務める持永誠さん（82歳）。

**住民の資格や技能を生かし  
 各部隊で活動**

GHおたすけ隊は発足当初、利用料

は無料だった。しかし、利用者から感  
 謝の気持ちとしてお礼を受け取ってほ  
 しいとの声が高まったことから、気遣  
 いなく頼めるようにと現在は1件1回  
 につき、基本500円の有償としてい  
 る。利用できるのは主としてグリーン  
 ヒルおよび自治会を同じくする近隣地  
 域の高齢者世帯、障がい者を有する家  
 庭、子育て家庭。また、支援する隊員  
 は無償のボランティアだ。

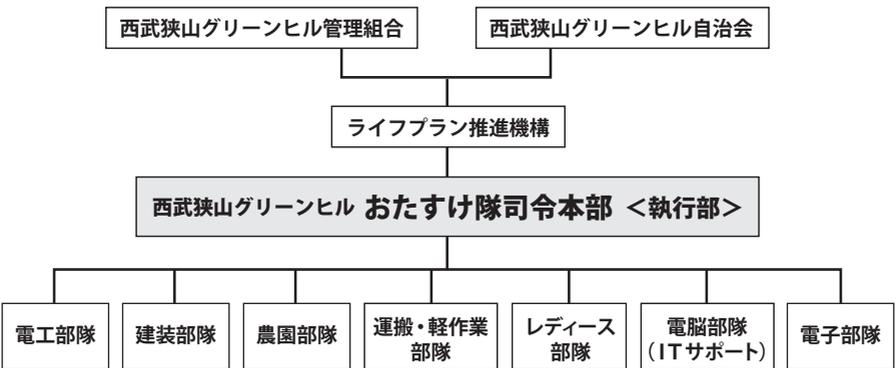
「活動資金については、最初の数年間



活動に必要な工具類や荷物の運搬に使うリュックなども自前で調達

はライフプラン  
 推進機構の活動  
 費で賄ってきま  
 したが、17年度  
 より入間市介護  
 保険課から年間  
 12万円の補助金  
 が給付されるこ  
 とになったのを  
 契機に、自治会

**【西武狭山グリーンヒルおたすけ隊組織図】**



・管理組合と協議の上、財政上独立。現在は市に加えて、県や民間の財団からも補助金をいただいているので、自治会や管理組合からの補助は受けていません。これまでに補助金で購入した物は、作業服、チョッキ、夏のポロシャツや、帽子等。また利用料は事務経費や活動に必要な工具、荷物の運搬に使うバッグなどの購入に充てています」

活動の実績は、昨年度の依頼実績で約500件。稼働隊員は延べ1000人以上。おたすけ隊のロゴマークが入ったおそろいのウェアに身に着けて活動することで団地内での認知度も高まり、今では住民から「ありがとうございます」「お疲れさまです」といった声をかけられることも増えたという。「活動が軌道に乗ってきたのは、3年が過ぎた頃からでしょうか。隊員の中には電気工事や日曜大工、IT関連など、特殊な資格や技能をもっている人

もいることがわかり、現在は技能ごとに7部門に分けて支援活動が敏速にできるようになりました。また、隊員の構成は最初ほとんどが男性だったので、女性も少しずつ増えてきたことから『レディース部隊』も発足しました」

### 細やかな心遣いと丁寧さが好評のレディース部隊

レディース部隊の一員でもある広報の小野ちはるさんは、最初は利用者だったという。

「管理組合の理事当番が回ってきて、その理事会の席にGJおたすけ隊の方がいらして、『団地内での支援活動を始めたので、宣伝してください』とプレゼンされたんですね。当時はまだ発したばかりで認知度も低かったので、応援するつもりでベランダ掃除をお願いしたところ、そのときに来てくださ

った隊員の皆さんがとても感じが良かったです。それで、こういう組織だったら私も一緒にお手伝いしたいなと思ったんです」と、活動に参加することになった動機を語る。

レディース部隊のメンバーは現在8人。主な活動内容は、平日のごみ出しをはじめ、部屋の片付けや買い物代行、縫い物など。

「例えば裁縫であれば、ズボンの裾上げやボタン付けをしてほしいとか、カーテンを買ってきたけど寸法を間違えたから直してほしいなど。買い物代行は、必ず事前に依頼者と打ち合わせをします。買い物メモに、鶏肉〇〇と書かれています。どれくらいの量を買ってきたらいいのかわからないので、何グラムぐらい必要か確認したり、ひじきにしても生ひじきなのか乾燥ひじきなのか、芽ひじきなのか長ひじきなのかわからない。牛乳だって好みのメーカ

1があるじゃないですか。隊員の皆さんは長年主婦をやっていますから、そういうこだわりもわかっているのので、できるだけ希望通りの物を買ってこよう」と心がけているんです」

こうした女性ならではの細やかな心遣いと繊細かつ丁寧な作業内容が好評で、今や男性部隊を上回るほどの活発な活動状況だという。

## 日常のさまざまな「困った」に幅広く対応

そのほかには、どのようなニーズが多いのだろうか。活動担当の石坂陽一郎さんに聞いた。

「2大ヒットメーカーは、障子紙の張り替えと包丁研ぎです。どちらもそれぞれ得意とするスペシャリストがいて、障子紙の張り替えはもう1000件近くやっています」

毎年、チラシをつくって予約受付を



チラシを作って回覧板で広報

行い、11〜12月にかけて作業。障子紙の張り替えは狭い家の中ではやりづらいため、障子を外して集会所に運んで行っているが、特筆すべきは、その作業を連携プレーで行っている点だ。

「まず、障子を引き上げて集会所まで運ぶ部隊がいて、レディース部隊が古い紙を剥がし、スペシャリストが張る。

そして乾いたら、今度は納品部隊が取り付けに行くという流れです。スペシャリストは1人しかいないので、少しでも効率よく作業ができるようにこのような仕組みを考えました」

できることをできる人がする、というのは、まさに助け合いの基本。

「粗大ごみ出しの依頼も多いですね。家の中でいらなくなったベッドや家具などを処分したいと。予約をすれば、業者が収集してはくれるのですが、各戸までには取りに来てくれず、当日の朝までに階下まで降ろしておくのが決まり。でも、団地にはエレベーターはついていないし、高齢の方などはとても4階や5階から下ろせないということで、SOSが入ります」

ほかにも、電球の交換やドアクローザーの開閉スピードの調整、パソコンやタブレット、スマートフォン等の情報電子機器に関するサポートなどの依

活動の様子（家具の修繕、障子紙張り替え、電球交換）



頼も。いずれも、業者に頼むほどのことではないが、日常の「ちょっと困った」に対応するものばかり。

「こんなことは引き受けてもらえますか？」という依頼や問い合わせは、基本的には断らないのがモットー。「もちろん、やってみてこれは無理というものとは撤退しますが、できる限りのことはしたい」と石坂さん。GHおたすけ隊が居住者にとつて、とても心強い存在となっていることは想像に難くない。

### みんなで力を合わせれば 難問も乗り越えられる

活動の広がりを超高齢化してきた団地の将来を意識してのことだと思われるが、「それは隊員のみならず同じ思い」というのは持永さん。

「隊員の最高齢は85歳で、最年少は44歳。活動の中心を担っているのは70代

ですが、体が動く間、元気な間は、お互いに助け合おうではないかという、ボランティア精神が住民の間に広まってきていると感じています。コロナ禍にあつても、団地内でお互い顔見知りなので、『来てください』『行きます』と言いやすい面もありますしね。いずれにしても今後ますます高齢者は増えていくので、ニーズは増えることはあつても、減ることはないと考えています」

副隊長の小澤滋さんは「定年になって時間もある。何か社会貢献をしたいという人もけっこういるように思う」、小野さんは「自分の得意分野を生かしたいという思いもあります」と言い、石坂さんは活動について、「まあ、苦あれば楽ありですかね（笑）。でも、自分が楽しくなければやっていません」と話し、さらにこう続けた。

「グリーンヒルは、自治会も管理組合



左から、広報の小野さん、隊長の持永さん、副隊長の小澤さん、活動担当の石坂さん

も住民主導で40数年続いてきました。この2つがベースとなつて、ボランティア活動も庭園ボランティアや防災ボランティアが組織されるなど、もとも

とお互いに助け合うような土壌づくりがありました。そういう先達の皆さんの努力や熱意があつてのGHおたすけ隊。だから、築50年近くで高齢者ばかりの団地だけれど、決して悲観はしていません。むしろ、みんなで力を合わせればどんな難問も乗り越えていけるのではないかと思っています」

団地内の花壇は手入れが行き届き、行き交う住民たちは互いにあいさつを交わす。そういう雰囲気の良いさは傍目からも感じられた。目頃からゆるやかにつながり、困ったときは助け合う。「体を動かさないと自分も弱っていきますからね」と笑顔で話すのは持永さん。情けは人のためならず。自分たちの団地を住みよい場所にしようという共通の目的の下に、隊員の皆さんが和気あいあいと楽しそうに活動している姿が、うらやましくも印象的であった。

西武狭山グリーンヒル内で活動する、高齢者等の生活支援ボランティア組織。主な活動内容は、①電球の取替、カーテンの付け替え、②荷物の運搬、移動、粗大ごみの搬出、③新聞等のごみ出しの援助、④家電製品の調整、⑤家具の固定、耐震金具、手すりの取り付け、⑥買い物支援、⑦一般家庭生活用品の修理、清掃、障子紙の張替、⑧垣根の手入れ、芝刈り、草取り、⑨ITサポートなど。利用料は1件1回につき500円（一般ごみ出しの援助は1回100円）で、チケット券（100円券）も販売。活動を支援する隊員は無償のボランティア。

●連絡先／〒358-0013 埼玉県入間市上藤沢406-1  
電話 04-2964-3450

# 移住

## 悪くないですよ

第7回



# 心許せる仲間たちとの日々

## 新地 章倫さん（長野県佐久市）

都会生活が長くなり、息苦しさを感じて定年前に長野県

佐久市へ移り住んだ新地章倫さん。退職後、地域でさまざまな

活動に参加するうちに、現役時代とは違う関係性がいくつも生まれていました。「それを意識してここに来たわけではないのですが、気づいたら、信頼でき心許せる友人たちがまわり

にいました。本当にありがたいことです」と話す新地さん。仕事からは離れ、趣味や社会貢献をしながらどのような生活をしているか聞きました。

（取材・文／塩瀬 潔泉）

## 住む場所を変えたいと新幹線で通勤

新地章倫さんは鹿児島県出身。東京の立教大学に進学し、卒業と同時に母校の職員となって以降、62歳まで40年間、池袋の同大学に勤務



した。総務・人事、総長の下での企画等を担当したほか、校友会事務局も長く担当した。埼玉県上尾市の自宅マンションから通勤し、学生と関わる仕事には楽しみもやりがいもあったが、50歳を過ぎた頃から心境に変化が現れてきた。

「鹿児島出身ですし、何とも言えない息苦しさというか、『ここでずっと生きて、どうするのか』と思うようになったんです。移住して何かしたいというより、住む環境を変えたかった」

52歳の頃、他大学との会議に出席した際、ある大学の職員が栃木県的那須地方から都心のキャンパスに新幹線で通勤しているという話を耳にした。「そんな方法があるのか」。それから新地さんは、自分も新幹線通勤して休日を田舎で過ごせないかと考え始めた。

住む場所は、妻・千鶴子さんの出身地、長野県。新幹線が開通しており、佐久平駅から池袋までなら通えなくはない。ただ、月7万円もかかる定期代はやはり自腹で。そうなると自宅マンションを

売却して、手元に残るお金をこれからの交通費に――。そんな計画に千鶴子さんは当初、「もう少しよく考えたら」という反応だったそうだ。

「学生時代からの友人で子どももいないし、結婚以来ずっと友だち夫婦で来ましたからね。妻は、先のことについてそれほど考えたことはなかったようです」

それでも、隣の佐久穂町には千鶴子さんの姉夫婦もいるし、一度行ってみよう、と千鶴子さんを



浅間山を望む佐久の田園風景。晴れの日が多いことも新地さんは気に入っている



誘って佐久を訪れた。新地さんの「もうそろそろ都会はいい」という様子を見て、千鶴子さんも最後は納得してくれた。

2008年1月、新地さん54歳のとき、佐久平駅近くに新築した一戸建てに夫婦で引っ越し、新地さんは新幹線通勤で仕事を続けることにした。それから13年。千鶴子さんも、姉がいて浅間山があるこの地を気に入っているようだという。

### シニア大学に入学 学びと仲間づくりの2年間

大学は職位退職が60歳で、65歳までは勤務できることになっていた。新地さんも職位退職した後、勤務を続けたが、これからは若い職員に頑張ってもらうほうがいいし、新幹線通勤も大変だと感じるようになって62歳で退職。佐久で何かしら仕事に就こうと活動した時期もあったが、マッチする職場になかなか出合えなかった。読書などで悠々自適の日々を送る中、新地さんは県のシニア大学に入学することにした。

シニア大学では2年間、8〜10人ほどのグループで地元の歴史などを学んでいく。佐久学部に所属した2年間の「学生生活」は、新地さんにとって素晴らしい学びと仲間づくりの場となった。

テーマを設定して研究し、成果を発表する課題で、新地さんたちのグループは千曲川に架かる橋の欄干に彫られている物語に着目。これを手がけた佐久出身のきりえアーティスト、柳沢京子さんを訪ね、地元で伝わる大男「デーランボー」の民話について話を聞いた。柳沢さんもわざわざ訪問してくれたことを大変喜び、「この話は紙芝居になっているから、子どもたちに読み聞かせをしてみても」という提案ももらった。

この頃すでに、公募から地元高校の評議員になっていた新地さんだが、そこで一緒に活動している元学校長だった人にこの話をしたところ、「私が話を通しますよ」と協力してくれ、橋の近くにある小学校の1年生に読み聞かせをする機会を得た。

「子どもたちがとても真剣に聞いてくれましたね。質問も出たりして、良い経験をさせてもらいました」

同じグループには、自分や夫の親を介護の末に看取り、その後シニア大学に来たという女性が何人かいて、いろいろな苦労話を聞くこともできたという。

「介護や看取りは、心身共に容易なことではなかったでしょう。よく頑張ったと感動しました。地道だけれども、しっかりと生きている人たちが仲間でした。それがシニア大学で一番心に残っていることです」

年齢も利害関係もなく2年間を共にした「同級生」は、今も交流がある得難い仲間だ。

## ○ ハーモニカと詩吟と

10年ほど前、姉夫婦の梅の収穫を手伝っていた千鶴子さんは転倒してけがを負った。しばらく歩けなくなり、何かしたいと公民館で習い始めたの

がハーモニカだ

ったが、その後、

新地さんも仲間

に加わり、今で

は夫婦共通の趣

味。コロナ禍前

まで、知人が運

営する宅老所に

千鶴子さんと

月1回訪問し、

昭和歌謡などを

演奏していたが、

90歳を超えた人も認知症のある人も、みんな昔の

歌を楽しそうに歌い、「また来てくれたねえ」と

喜んでくれていたそうだ。

また、シニア大学の実技で詩吟を選択した新地さんは、その奥深さに引き込まれて卒業後も稽古に通い、今や初伝の実力。あるとき宅老所で一曲吟じたところ、利用者たちが「昔、習ったことが



ハーモニカサークルの仲間と。前列右から3人目が新地さん、後列左から2人目が妻の千鶴子さん



シニア大学時代の友人が開催している居場所で披露した「(仮想)北海道バスツアー」。新地さんが脚本・司会を担当し、「函館の女」「襟裳岬」など北海道にまつわる曲をハーモニカで演奏して、コロナ禍の高齢者にひととき旅行気分を味わってもらった(左は運転手に扮した新地さん)

ある」と一緒に歌い始めて驚いたが、そうした出来事にこちらが元気づけられていると感じた。後で千鶴子さんと「自分たちのためにやっているんだよね」と話したという。

新地さんは、今は亡き母親を鹿児島から長野に

\* \* \*

呼び寄せていたが、その母親が入居していた軽費老人ホームで理事長に声をかけられて評議員を務めたり、応募して佐久市協働のまちづくり推進会議の委員を務めるなど、佐久でさまざまなつながりを築いている。そこでのエピソードや出会った人たちについて、一つ一つ楽しそうに語る新地さんの表情が、移住した地での新たな発見に心動かされながら過ぎてきたことを物語っている。

「最低気温がマイナス15度だったときは『ここに来てよかったのかなあ』と思ったりしましたが(笑)、朝起きて、浅間山、北アルプス、八ヶ岳が見えるこの地は、私が生きる上での大きな助けになっています」

朝は、一番の友たちである千鶴子さんと2人、1時間の散歩が日課だ。近くには妻の姉夫婦がいて、折々に出会った信頼できて心許せる友人たちがいる。

「こういう関係が続いてくれたら幸せですね」と笑顔で語ってくれた。

# 応援ありがとうございます！

## 「地域助け合い基金」 助成先のご紹介

皆様のご寄付を原資に、コロナ禍での困りごと解決のための活動や、地域共生社会への取り組みを支援している「地域助け合い基金」。今月号では、生活支援コーディネーターとの連携でコロナ禍を乗り越え、有償ボランティアによる助け合い活動をスタートしたグループなどをご紹介します。

なお、このほかの助成先団体の活動報告も財団ホームページに続々アップしていますので、ぜひご覧ください。

宮城県富谷市

### フードバンクと弁当配布で コロナによる困窮の食料支援と見守り

NPO法人ふうどばんく東北AGAIN

助成金額 15万円

ふうどばんく東北AGAINは、企業・団体や個人から廃棄されてしまう食品の提供を受けて、仙台市を中心とする県内の生活困窮者や福祉施設・団体に無償で届ける活動

また、子ども食堂や子どもの居場所づくりを進めてきました。

しかし、昨年度からは新型コロナウイルスの影響で人を集めての開催が難しくなり、休校中の学校給食もなくなることから、食費が家計を圧迫することになりました。そこで、一人親家庭の見守りも兼ねて週1回水曜日に、夕食時の支援弁当を作り配達を行いました。お弁当作りや配達にはシニア世代が多く参加して生きがいを感じてくれており、そのような方たちの交流の場にもなっているとのこと。本基金の助成金は、このお弁当支援の食材、衛生用

品、弁当容器、光熱費として活用されました。「新型コロナウイルスの影響でそれまで普通に生活してき

た人たちからSOSが届きました。もし大変なときにフードバンクの存在を知っていたら、それが心の支えになるはず。反対に、そんな誰かの役に立てたらと思っている人も。この



フードバンクの活動

ふうどばんく東北 AGAIN が開催する  
JINA 食堂～みんな AGAIN～



日時 9月5日(土)

16時～19時

親子食堂 お弁当配布 100食

大人 300円 こども無料

※大人 300 円の支払いが難しい場合はご相談下さい！！  
誰でもご利用できる食堂です。普段は、月一回富谷市成田  
のふうどばんく東北 AGAIN を会場に開催。今はコロナ感染  
症対策のため、お弁当を配布しています。

フードバントリー (食糧の詰め合わせ配布)

無料 30 世帯限定

※コロナ禍で様々な理由でお困りの子育て世代の方に、食材の詰め合わせを配布致します。  
どちらにも予約制となっております。お気軽にご予約下さい！！両方に利用も可能です。  
電話やメールにて、ご予約下さい。

お問い合わせ先 ふうどばんく東北 AGAIN

富谷市成田 8 丁目 1 - 1

TEL: 0242-77-7777 MAIL: info@fudobank-tohoku.com

※次回開催は 10 月 10 日 (土)

お弁当配布を告知するチラシ

場所に多くの人に関わってもらおうことで、想いをつないでいます」との報告を下さいました。

新潟県佐渡市

生活支援コーディネーターと連携し  
コロナに負けず有償ボラをスタート

ささえあいの会

助成金額 5万円

ささえあいの会は 2019 年度から、有償ボランティア活動を始めるために前任の生活支援コーディネーターと 4 回ほど打ち合わせを行ってきましたが、新型コロナウイルスの影響で活動をスタートできませんでした。しかし昨年 6 月から、後任の生活支援コーディネーターと打ち合わせを再開し、チラシ作り、会則作り、ボランティア活動保険加入手続き等を手伝ってもらいながら、7 月に活動を開始しました。買い物支援、受診付き添い、部屋の掃除、ごみ出し、施設入所のための送迎付き添い等を、「困ったときはお互いさま ちよっとしたことを有償でお手伝いします」として活動しています。毎月、生活支援コーディネーター

を交えて定例会も開催し、活動報告や課題抽出、意見交換等もしているそうです。

利用会員からは、「付き添ってくれたおかげで自分の目で見て買い物できてよかったです」という感想が聞かれたほか、代表の祝いわい久乃さん自身も男性の協力会員に水道ホースの取り付け等を頼むことができたり、体調が優れないときに女性の協力会員から買い物支援を受けたりしてとても助かっているとのこと。また、生活支援コーディネーターの協力で勉強会や講座に参加



活動の様子 (左) 車での買い物支援 (右) 掃除と粗大ごみの撤出

し、島外の事例を学んだり、島内のボランティアグループと意見交換会もできたということです。本基金の助成金は、ボランティア活動保険加入費用、消耗品類の購入、活動会員への交通費、会議費用に充てていただきました。

今後に向けては、「お互いに支え合いながら無理のない範囲で活動を続けていきたいと考えています。そして、私たちの活動に共感してくれる方々が少しずつでもいいので増えてきたらと願っています」とのことです。

熊本県熊本市

## オンラインを導入し

## 発達障害当事者会の選択肢が増えた

NPO法人凸凹ライフデザイン

助成金額 10万円

凸凹ライフデザインは、福岡、熊本、宮崎で発達障害当事者の当事者会、自助グループに、場所の提供、事務作業、連絡などの運営サポートを行いながら、月1〜2回の定例会にも参加しています。

コロナ禍によって、当事者会・自助会に参加していたメ

ンバーの中に、感染の不安、公共交通機関利用の不安、家族事情の変化、経済的に厳しくなった等の理由で会への参加が難しい人たちが出てきました。参加できなくなったりと毎月のリズムが崩れ、不調を感じているという人たちもミーティングに参加できるよう、会場と各自宅をオンラインでつなぎ、多様な参加スタイルを保障したい。また参加者が減って存続できなくなった会も併せてオンラインでつなぎ、地域の会に参加できなくなった人たちの機会を守る活動を行おうと、本基金の助成に応募してくださいました。助成金でオンライン参加案内パンフレットを印刷したほか、これまで保有していなかったパソコン（中古）やウェブカメラ等を購入できたことよって、取り組みを進められた、と報告をいただきました。

また、当事者間のオンラインでの話し合いノウハウが各団体に蓄積されたことも成果であり、パンフレットは自立支援協議会、関係団体を通じて配布中とのことです。「新たにオンライン参加という選択肢ができました。参加しやすい方法、スタイルを選んで、多くの方に参加していただき、発達障害への理解を深めていただきたい」ということです。

発達障害当事者会に行きたいけど、

会場まで行く手段がない…子どもがまだ小さいし…感染症のリスクが不安…

そんな時は、オンライン参加してみませんか？

オンライン参加のしかた

- ①当事者会の開催情報を調べる。
- ②参加したい会・日時を決める。
- ③申し込みをする。 申込方法
- ④返信を確認する。
- ⑤当事者会の開催当日、当事者会の会場とオンラインでつながります！

以下の当事者会へのオンライン参加を受け付けています。(2020.12現在)  
※それぞれの当事者会は、△凹ライブデザインとは別の団体（連携団体）です。

きなっせ！九州（福岡）  
熊本県発達障害当事者会Little bit（熊本）  
宮崎青年・成人発達障害当事者会ShiKiBu（宮崎）

△凹ライブデザインは、当事者会へのオンライン参加をサポートしています。

△凹ライブデザインがサポートしている会は左記の3つの会です。

○参加にはお申し込みが必要です。

お申し込み方法は、各当事者会のホームページやフェイスブックページをご確認ください（各会へ直接お申し込みください。）  
尚、その際必ず【オンライン参加希望】と明記してください。

※返信は必ずご確認ください。（返信が遅くなる場合がありますが、ご了承ください）

※お申し込みされた時点で、裏面の全てのルールに同意したものとみなします。

※ご質問は、[info@triangle-design.com](mailto:info@triangle-design.com)までお気軽にご連絡ください。

各会の情報（参考）

きなっせ！九州 Little bit ShiKiBu

公益財団法人さわやか福祉財団助成事業

当事者会のオンライン参加案内パンフレット

立ち上げから1年

# 「地域助け合い基金」状況のご報告

皆様のご支援により全国各地の助け合いを助成している「地域助け合い基金」。5月15日までの状況をご報告いたします。

## ◎寄付受付額

193件 1033万9700円

このほかに当財団より6千万円を供出

## ◎助成実行額

481件 6426万5350円

(5月15日 当財団ホームページ開示時点)

「地域助け合い基金」は、コロナ禍の昨年5月に立ち上げ、1年が経ちました。この1年間で、地域での助け合いを広げようとする団体・個人への助成は481件、金額にして6400万円を超えました。ご寄付やメッセージで本基金を支えてくださっている皆様に、あらためて御礼申し上げます。

これまでの助成先について集計しましたところ、NPO法人や一般社団法人等の法人格を持たない団体・グループが約7割さらにこれらの多くは設立5年未満という結果でした。こうした結果からは、全国各地でふれあい、助け合いの必要性を強く感じた住民の皆様が自ら助け合い活動を立ち上げ、広めていらつしやる状況が読み取れ、大変心強く感じています。

今後も当財団は、本基金を通して全国に住民主体の助け合い活動が広がるよう支援させていただきます。皆様の引き続きのご支援を何卒よろしくお願い申し上げます。(事務局長・内田)

当財団ホームページでは毎日、寄付と助成金額を開示しており、助成可能な金額もご覧いただけます。寄付や助成をお考えの方は参考にしてください。

●基金に関する情報、およびクレジットカード決済は、QRコードもご利用ください!



クレジットカード  
決済ページ



財団ホームページ内  
基金関連ページ

基金に関する  
ご意見・お問い合わせ

<地域助け合い基金担当>

電話：(03) 5470-7751 FAX：(03) 5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

# 「地域助け合い基金」で コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

皆様からのご寄付をお待ちしています！

## 1. 寄付金の使途

共生社会を推進するため、助け合い活動の支援に活用させていただきます。

助成の対象は、地域で暮らす人同士の助け合い活動であり、新たに団体を設立する場合のほか、新たに活動を広げる場合やコロナ禍に対応して特別な助け合い活動を行う場合も含みます。

高齢者、子ども、認知症、障がい、生活困窮の方々、刑余者、外国人、ケアラの支援ほか、分野は問いません。ただし、日本国内の活動に限ります。

本基金は、支援したい市区町村（区は東京都の特別区）をご指定いただけます。

## 2. 税制上の優遇措置

当財団にいただいたご寄付は、税制上の優遇措置の対象となります（当財団発行の領収証が必要となります）。

## 3. ご寄付の方法

### (1) 銀行振込によるご寄付

三井住友銀行 浜松町支店（普通）口座番号 7859452

三菱UFJ銀行 浜松町支店（普通）口座番号 0095446

（口座名義 ※いずれも同様）

公益財団法人さわやか福祉財団 地域助け合い基金

※銀行お振り込みの場合は、送金者の情報がカタカナ表記のお名前のみとなるため、当財団発行の領収書が必要な場合や地域の指定をご希望の場合は、お手数ですが「寄付申込書」を当財団宛お送りください。当財団へのお電話でも承ります。

### (2) 郵便振替によるご寄付

（口座記号番号） 00110-7-709627

（加入者名） 公益財団法人さわやか福祉財団

※通信欄に、ご指定がある場合の市区町村名（区は東京都の特別区）と、ひと言応援コメントなどをご記入ください。また、手数料不要の払込取扱票をご用意いたしますので、お申し出いただければ郵送いたします。

### (3) クレジットカードによるご寄付

右ページのQRコードもしくは当財団ホームページよりお申し込み下さい。

助成応募については、当財団ホームページをご参照ください。

「寄付申込書」「パンフレット」なども、ホームページからダウンロードできます。

<寄付・助成のお問い合わせ>  
地域助け合い基金担当

電話：(03)5470-7751 FAX：(03)5470-7755

メール：mail@sawayakazaidan.or.jp

# 老いの暮らしを創る

## 早めの引越

### ②

福祉ジャーナリスト 村田 幸子

「ここがいい！」と、全員一致で決

まった私たちの住まいは、マンション

ンでした。「もだち近居」という

暮らし方に賛同して集まった仲間とはいえ、

最初から全員が見知った関係ではありません

でした。本当にこの人たちと共に暮らしてい

けるのだろうか、こんな選択をしないのだ

ろうか。大なり小なり、こうした迷いは誰の

胸にもあったことでしょう。でも土地探しに

奔走している間、共に悩み、楽しみ、時には

感情むき出しのやりとりさえしながらも4年

という歳月を共有したことが、この人たちと

なら一緒に暮らしていけるという、皆の自信

につながりました。クリスマス会の時、

仲間の一人が言いました。「この4年間は長

いお見合い期間みたいなものだったのね」。

団塊の世代が一齐に退職の時期を迎えた頃、

果たしてその人たちが上手く地域にソフトラ

ンディング出来るだろうかと言うことが危惧

されました。それは男性の問題として語られ

ましたが、今は多くの女性が定年まで働き続

けます。従って女性とて同じ問題を抱えてい

ます。家族を中心に、地域に根ざした暮らし

をしてきた人たちと違って、地域社会に何の

関わりもなく過ごしてきた私たちのような女

性にとって、定年後、いきなり地域の仲間入

りをしたいと願っても、そう簡単にはいきま

せん。地域社会は、結構手ごわいものです。

地域社会と関わることなく、また家族と言

うまとまりを作り損ねたというものの、一方





で一人の暮らしを輝きあるものにしてくれる「友」という財産を手に入れることが出来ました。

住まいが決まるまでの間、当初の意気込みはどこへやら、意気消沈し諦めの境地になっていきましたが、そんな私たちの萎える気持ちを支えていたのは、2003年に仲間4人と取材に行ったデンマークの取り組みでした。デンマークには「福祉は住まいに始まって住まいに終わる」という言葉があり、福祉施策の基盤を「住まい」、つまり住宅政策にしています。レベルの高い住まいが、介護が必要であろうとなかろうと、保障されています。

多くの方が知るところですが、デンマークでは、在宅サービスを受けながら自宅で暮らすのを基本としています。しかしあまりにそこにこだわり過ぎたため、高齢者に体力がなくなり、いざ引越しをしたいと考えた時に

は、自らの力では引越すことが出来ないほど衰えているという結果を招いたのです。

この反省から、高齢者に適したバリアフリーの住まいをたくさん作り、手遅れになる前に引越しをと呼びかけ、「早めの引越し」を推進していました。私たちは大いに共感し、私たちが考えていた計画は決して間違っていないという自信に繋がったのです。以来「早めの引越し」が、私たちの合い言葉になりました。

2008年8月。マンション完成。それぞれが自分の城づくりにとりかかりました。私にとっては、自分の力で手に入れた初めての住まい。働き続けてきた果実です。使い勝手のいい部屋にしたいとあれこれ考えることは、ウキウキと心躍るものでした。しかし、その最中、思いもかけぬ感情に襲われ、私は間違った選択をしてしまったのだらうかと、呆然としてしまいました。



(むらた さちこ) 立教大学英米文学科卒業後、NHKにアナウンサーとして入局。報道番組のリポーターや社会性のある硬派の番組を中心に担当。1990年、解説委員に就任。NHKスペシャル「あなたが寝たきりになった時」、NHKモーニングワイド「高齢化社会」のキャスター他、多くの番組を担当。2004年、解説委員を退任後も高齢者問題の第一人者として活躍中。現在、江戸川総合人生大学「介護・健康学科」学科長。

大好評

# 動画『NEXT ~心と心をつなぐ工夫と取り組み~』

## ご活用ください！

コロナ禍にあっても、アイデアと工夫でみんなが笑顔になれる活動を紹介している当財団制作の動画「NEXT 心と心をつなぐ工夫と取り組み」（各8分程度）。皆様から大変ご好評いただいています。コロナの時代における助け合い活動のヒントとして、生活支援コーディネーターの勉強会のツールなどとして、ぜひご活用ください！



第1弾

奈良県生駒市



あなたの「元気」を届けよう  
プロジェクト

第2弾

静岡県袋井市



出前居場所・青空居場所・  
我が家のごはん届けます

第3弾

大阪府門真市



こんな時こそ地域のかで、  
ゆめ伴プロジェクト

第4弾

新潟県新潟市



受け身にせず  
「みんなで守ること」で活動再開

第5弾

岡山県倉敷市



つながる回覧・  
マスクプロジェクト

第6弾

神奈川県鎌倉市



食を通した居場所（みんなの）  
フードパントリー

動画は、当財団ホームページでご覧いただけます。

<https://www.sawayakazaidan.or.jp/movie-next/>

# 新しい ふれあい社会づくりに 向けて

いきがい

ふれあい

助け合い

さわやか福祉財団は、子どもから高齢者まですべての人が、  
それぞれの尊厳を尊重しながら、いきがいをもって、  
ふれあい、助け合い、共生する地域社会づくりを一貫して進めています。  
特に現在は、全国自治体が新地域支援事業で取り組んでいる  
住民主体の助け合いの地域づくりを強力に支援しています。  
どうぞ、皆様の地域の情報もお寄せください。

## ● 新地域支援事業・助け合いの地域づくり

北から南から 各地の動き

## ● その他の財団の活動 など

ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナー（賛助会員）・

ご寄付者の皆様のご紹介

さわやか活動日記(抄)





## 新地域支援事業・

### 各地の動き

(2021年4月1日～30日)

- 全国各地で、推進の支援をしています
- 活動の一部を紹介しています

#### 生活支援コーディネーター・協議体と連携

##### 草加市(埼玉県)

27日/草加市で生活支援体制整備事業の勉強会が開催され、当財団が講師を務めた。行政担当課、関係各課、第1層・第2層生活支援コーディネーター、社会福祉協議会、地域包括支援センタ

ーより計26名が参加した。

財団から、ガイドラインを基に制度の概要を説明し、生活支援体制整備事業を通して高齢者も含めた共生社会の実現を目指してほしいと話した。また、課題となっている地域包括支援センター、関係課との連携についても説明した。質疑応答ではさまざまな質問が積極的に寄せられ、充実した勉強会となった。

##### 美里町(埼玉県)

(岡野)

8日/美里町大沢地区の第2層協議体第1回目が開催され、当財団もオブザーバー参加。協議体メンバー9名、事務局から6名が出席した。大沢地区ではこれまで大づかみ勉強会を3回開催し、アンケートでの希望者を中心に協議体を立ち上げた。

今回は、協議体の愛称と、目指す地域像を決めることが目的。ヒントとして、財団から他市町村の例を紹介した。参加者から「みんな一緒にやっていくという気持ちを込めて『ふれあい』と

いう言葉を入れたい」との発言があり、多数が賛成。「ふれあい大沢さくら隊」という愛称になった。この愛称に即した目指す地域像を言葉にしたいと、「みんなで助け合い、ふれあい、大沢を支えたい」との発案に全員が賛同し、共生を意識した目指す地域像も決まった。

続いて、リーダーと副リーダーを決め、リーダーとなった男性が司会を務めながら話し合いを進めた。財団としては、今後も継続的にオブザーバー参加し応援していきたい。

(岡野)

##### 板橋区(東京都)

19日/板橋区の蓮根地区で第2層協議体構成員を対象とした勉強会が行われ、当財団も協力。同地区では、自治会長や民生委員が主な構成員となっており、今回は新たに加わった構成員の「協議体の役割を知りたい」という希望から実施に至ったもの。簡易的に行ったグループワークでは、各構成員から前向きな意見が出された。

(長瀬)

## 日進市（愛知県）

22日／日進市の第2層協議体構成員を対象に勉強会が開催された。この企画は第2層生活支援コーディネーターを務めるさわやかインストラクターの村居多美子氏の働きかけで、約30名が参加した。当日は新たに構成員として加わった住民に対し、椙山女学園大学人間関係学部の谷口功教授の講話に加え、当財団は協議体の役割などについて情報提供で協力した。参加者からは、今後の進め方などに関し前向きな意見が出された。

（長瀬）

## 新潟市（新潟県）

15日／新年度第1回の新潟市戦略会議が開催され、当財団もメンバーとしてオンラインで参加。新体制の状況（生活支援コーディネーター・協議体、行政）を確認し、これまでの取り組み状況や課題を共有しながら、今後の取り組みについて議論した。

同市は政令市であり大規模自治体だが、各区に地域包括ケア推進モデルハウスを核として設置、また、有償ボラ

ンティア「お互いさま・新潟」にも取り組むなど住民主体の助け合いを見える化して、一人ひとりが「助けてと言える地域」を目指し推進してきた。2025年まであと5年の今、これまでの状況を振り返り、今後に向けての議論となった。40名以上の第1層・第2層の支えあいの仕組みづくり推進員（生活支援コーディネーター）の入れ替わりもあったため、あらためて基本を理解し、新任生活支援コーディネーターが自信を持って取り組めるように研修や共有の機会をつくりながら進める。そのため、まずは5月に第1層の支えあいの仕組みづくり推進員の連絡会を開催し現状と目指す方向を共有することにした。

今年度も支えあいの仕組みづくり推進員と協議体、担当行政など関係者の情報交換会を開催したい。また、モデルハウスについて第1層支えあいの仕組みづくり推進員を中心に区ごとに評価しながら、きめ細かな住民主体の助け合いの地域づくりを進めていく。常

に住民主体の重要性を理解し共有する機会をつくりながら進めていこうと共有した。財団も、包括連携協定の関係を大事にしながら今年度も知恵を出し合い共に推進していきたい。（鶴山）

## 広島市（広島県）

14日／広島市では昨年11月に「広島市地域共生フォーラム」を開催し、地域共生社会の目指す姿や他機関連携の必要性を共有したところ。今回は地域の支え合い推進に向けて、特に第1層と第2層の生活支援コーディネーターが目的や役割を共有し、地域での実践につなげていくための勉強会（第1回）が広島市社協の主催で開催された。参加者は市内の生活支援コーディネーターに加え、行政、地域包括支援センター、市・区社協職員等で約50名が集まった。市からは、市内の状況と取り組み方針、当財団からは助け合いの必要性と役割および具体的実践手法を説明した。さらに第1層と第2層が連携して取り組んでいる事例を市社協から紹介した。

生活支援コーディネーター  
養成研修等に協力

限られた時間の中で詰め込んだプログラムとなったが、地区課題の対応について複数の質問が出るなど今後の取り組みへの熱意が溢れる勉強会となった。

(高橋)

## 群馬県

20日／群馬県西部ブロックの新年度第1回生活支援コーディネーター連絡会が開催され、当財団も新地域支援事業推進協議会メンバーとして参加した。同連絡会は県のバックアップ企画として構成されたもので昨年度から開催されている。新年度で異動に伴うメンバーの入れ替わりがあったことから、今回は顔合わせと今後の進め方の確認を実施。初回から新メンバーの積極的な発言で順調なスタートとなった。

(長瀬)

## 埼玉県

22日／埼玉県の生活支援コーディネーター協議体会議がオンラインで開催さ

れ、生活支援コーディネーター9名、行政職員4名、県社協職員4名が参加。当財団も委員として参加した。

同県では、埼玉県委託の下、県社協が事務局となり指導者クラスの生活支援コーディネーターや行政担当者も参加して県の年間研修計画について協議し、運営にも協力している。今年度は、コロナで昨年度開催できなかった現場視察研修をオンラインで実施する方向となり、財団も生活支援コーディネーター基礎研修担当者の一員として協力していく。基礎研修については、グループワーク実施の要望があることから、講義は動画で、グループワークは別途オンラインで行うことになった。また、コロナ禍で情報を早く知りたいとの新任生活支援コーディネーターの要望があり、当初の開催予定を早めて6月初旬の開催が決定した。

基礎研修のほかに、北南東西に分かれていますの「ブロック別研修」、生活支援コーディネーターからアンケートでテーマを募集し、そのテーマに合った講

師を招いて行う「課題別研修」、行政・生活支援コーディネーターが合同で参加する「合同研修」、そして「現場視察研修」を組み合わせ、年間研修を行うこととなった。

28日／埼玉県の生活支援コーディネーターが任意でオンライン上に集まり情報交換を行う「生活支援コーディネーター交流会」に当財団もオブザーバー参加した。この交流会は、自ら紹介したい案件などを持ち寄り、お互い学び合う場として生活支援コーディネーターが発案し、開催している。

今回は、民間のドラッグストアが母体となっている地域包括支援センターの取り組みについての情報提供があった。最初は利用者がほとんどなかったが、地域住民を大切にする姿勢を徹底し、今では毎日何らかのイベントが行われ、子ども食堂も開催されているとのこと。

(岡野)

(本稿は、岡野貴代、高橋聖、鶴山芳子、長瀬純治)

# ご支援ありがとうございます。

さわやかパートナーは、本財団の趣旨にご賛同いただき、財政的・精神的にご支援くださる賛助会員の皆様です。会費は寄付金の一種として大切に活用させていただきます。新規ご入会の会員の方、会員をご継続いただきました皆様も毎号ご紹介いたします。また、個別のご寄付をいただきました皆様もご紹介させていただきます。

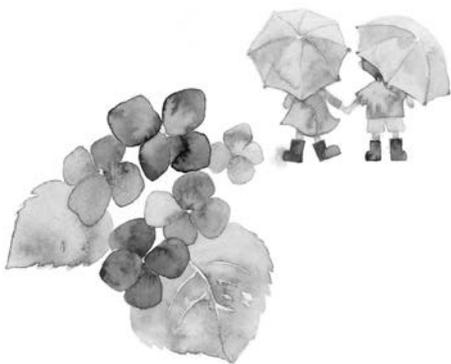
(敬称略) (2021年4月1日～4月30日財団受付分) ※なお、自動振替の場合等、処理日と財団受付日にずれが出て掲載時期がずれる場合があります。ご了承ください。

## さわやかパートナー個人(75件)

(都道府県別50音順)

北海道	酒井 勝男	伊豆 幸美	長尾 立子	平野 潤一	北村 哲也
竹内 修一	タニツケイコ	稲川 寿子	長吉 多佳子	新潟県	中川 光郎
宮城県	中村 清子	稲田 美紗	林 幹高	河田 珪子	岡山県
内海 裕一	細井 親子	今里 節夫	細矢 博康	長谷部 義子	氏家 明子
佐藤 かつよ	森戸 伸行	宇野澤 虎雄	松尾 邦弘	富山県	谷 敬子
山形県	渡辺 敬子	大島 勝喜	宮部 敬子	柵田 美智代	広島県
阿部 良二	千葉県	片桐 弘之	吉岡 高志	福井県	島本 幸子
栃木県	浅野 克男	神谷 武秀	和久井 良一	北畑 英子	長井 和子
山田 尚美	小澤 利政	木村 智都子	渡辺 由美子	長野県	濱崎 雄司
埼玉県	島 利栄子	金城 清	神奈川県	塩原 律子	徳島県
五十嵐 紀男	鈴木 章	黒松 利砂	大石 恵子	愛知県	酒井 やよい
小関 和夫	堀井 豊	鈴木 慶子	岡本 淳	齋藤 みどり	福岡県
佐伯 昌子	渡部 功雄	鷹野 義量	恩田 實	菅 文夫	岩井 順子
佐伯 美穂英	東京都	寺井 正也	佐野 圭子	瀬川 正俊	佐藤 須美子
			清野 行雄	三重県	芳賀 晟寿
			角井 佑子	西村 美紀子	長崎県
			西島 康二	京都府	猪山 勝利

古賀 秀隆  
宮崎県  
渡邊 ユミ



さわやかパートナー法人 (5件)

(50音順)

NPO法人青葉台さわやかネットワーク  
京セラ株式会社

医療法人社団潤康会芝パーククリニック  
太平洋工業株式会社  
株式会社中村塗装店

一般ご寄付 (2件)

(50音順)

佐藤 清勝 (10万円)  
高橋 愛子 (2万円)

地域助け合い基金ご寄付 (3件)

(ご寄付日付順)

ヒノクマ アツコ (3千円)

山田 健一郎 (1万円)

田中 茂利 (2万円)



9月開催のいきがい・助け合いサミット in 神奈川にお役立てください

## いきがい・助け合いサミット in 大阪 『助け合い大全'19』

2019年9月に開催した「いきがい・助け合いサミット in 大阪」のすべてを収録した『助け合い大全'19』です。

サミットでの全体シンポジウムと各分科会における発言要旨をまとめた『パネル編』、ポスターセッション出展の全作品を掲載した『ポスター編』、そして『提言編』を3冊セットで頒布しています。9月1・2日開催の「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」の参考資料としてもご利用ください。

お申し込みは当財団まで → [mail@sawayakazaidan.or.jp](mailto:mail@sawayakazaidan.or.jp)

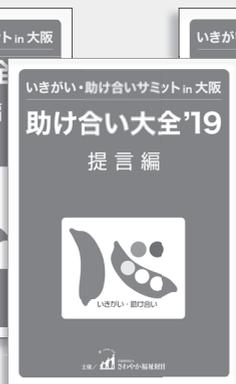
1セット2,000円(税込み) 送料別途 ※3冊セットのみでの頒布となります。

### 【助け合い大全'19 提言編 目次】

- いきがい・助け合いサミット in 大阪の意義と特徴
- 全体シンポジウム発言要旨
- 分科会 1～54  
提言／登壇者／議事要旨
- ポスター展
- いきがい・助け合いサミット in 大阪を振り返って



ポスター編



提言編



パネル編

# さわやか活動日記(抄)

〈2021年4月1日～4月30日〉



情報・調査事業

調査政策提言  
プロジェクト

## 子どもの共感力を育てる 検討委員会

第2回委員会を開催

〔4月7日〕

子どもの共感力を育てる第2回検討委員会  
が、4月7日に東京都港区のA P浜松町で開催された。

第2回検討委員会では、1月に開催された

第1回検討委員会テーマ「子どもの共感力を育てるには何が必要か。そのために地域は何かできるか」について継続して討議を行い、委員それぞれの立場から意見や事例などを説明してもらった。

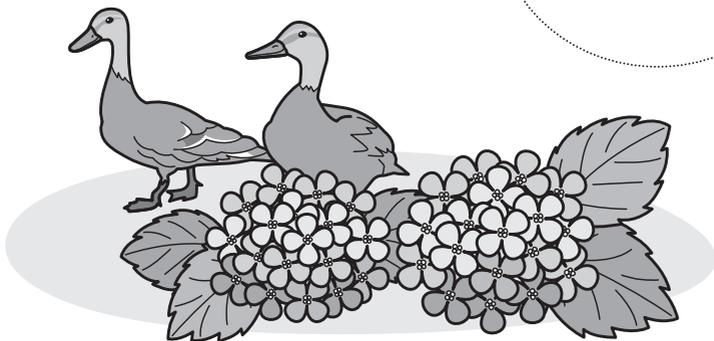
「子どもと高齢者が一緒にできる多様な遊びの事例」「両者にとって幸せと感ずるといふコンセプトに基づいた遊びの事例」「子どもたちが安心して失敗できる環境をどうつくれるかが大切というポイント」「データに基づいた『共感力』に紐づく理論」等が発表されて議論を深めた。次回検討委員会は7月頃、児童精神学や脳科学の専門家を加え、さらに別の角度から「共感力の育成」についてお話をいただき、質疑をしながら深める予定。検討委員会は全4回の予定だったが5回とし、10月までに報告書にまとめしていく。(日崎康)

### 事務所 だより

●まだまだコロナ禍で見通せないが、こんなときだからこそ、日々の助け合いのヒントを一つも見つけてもらえるよう「いきがい・助け合いサミット in 神奈川」に参加してほしいとスタッフ一同、準備中。もちろん、申し込み受け付けも始まっています。オンラインによるライブ配信も行いますので、リモートによるご参加もお待ちしております！



# みんなの広場



神奈川サミット、  
参加します

蓑輪 照雄さん 73歳

福井県

福祉ジャーナリストの村田幸子さんのファンです。「さあ、言おう」の村田先生のエッセイ「古いの暮らしを創る」を読みました。私が二十歳の頃、村田先生がNHKラジオの番組を担当していらしたとき、村田先生のおしゃべりが大好きで、ファンとして手紙を出しましたら即お返事を下さり、今も大切にしまっています。

私は地域支え合い推進員（生活支援コーディネーター）をしています。さわやか福祉財団の大阪サミットには参加しました。今年の神奈川サミットも参加するつもりです。

村田さんファンの心って、生活支援コーディネーターにぴったりですね





『さあ、言おう』投稿募集

## あなたの意見を社会へ生かそう

『さあ、言おう』は皆様の声を社会につなげる  
問題提起型情報誌です。

### ぜひ皆様の声をお寄せください

『さあ、言おう』では、取り上げたテーマに対する読者の皆様からのご意見・ご感想、あるいは普段気になっているテーマに基づいた体験談や提言などを随時募集しています。

#### 常設テーマ

- 地域の助け合い活動について
- 助け合いの地域づくりについて
- いきがい、社会参加について
- 居場所や地縁組織、NPOの活動について
- 新地域支援事業について
- 生き方について など

#### 投稿の方法

- 字数や回数制限はありませんが、掲載にあたっては誌面の都合上、編集要約する場合があります。あらかじめご了承ください。
- 一般投稿は形式は問いません。本誌添付の投稿ハガキなどもご自由にご利用ください（原稿はお返しできません）。
- 投稿は、事情が許す限り本名でお願いします。  
ただし、掲載時には匿名、あるいはペンネームの使用も可能ですので、その旨お書き添えください。
- 投稿時には、お名前ほかに、ご住所、連絡先お電話番号をご記入ください（内容により質問させていただく場合があります）。性別、年齢もよろしければお書き添え下さい。大変参考になります。

#### 送付先

〒105-0011  
東京都港区芝公園2-6-8  
日本女子会館7階  
公益財団法人さわやか福祉財団  
『さあ、言おう』編集部宛  
FAX (03) 5470-7755  
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp



私たちはふれあいあふれた地域づくりを支援しています

## さわやか福祉財団の活動をぜひご支援ください。

『さあ、言おう』はみんなで新しい社会のあり方を考える問題提起型の情報誌です

■さわやか福祉財団の活動をさわやかパートナーとしてご支援ください。

『さあ、言おう』を毎月お手元にお届けいたします。

さわやかパートナーは、さわやか福祉財団の理念と活動に共感して会員としてご支援いただく賛助協力者の皆さんです。

個人  
年会費

Aコース 10,000円

Bコース 3,000円

法人  
年会費  
(1口)

Aコース 100,000円

Bコース 20,000円

公益財団法人さわやか福祉財団の会費は、特別な特典を付与するものではない賛助会費であり、寄付金の一つの形です。

■寄付金は税金の控除対象となります。

さわやか福祉財団へのご寄付は、所得税、法人税等の控除対象となります(所得税の寄付控除額の上限は所得の40%-2000円)。

一般ご寄付を  
いただく場合の  
お振込口座

口座名義：公益財団法人さわやか福祉財団

郵便払込 00120-9-668856※

三菱UFJ銀行 浜松町支店 普通預金 口座番号3731714

りそな銀行 芝支店 普通預金 口座番号1174297

※手数料不要の専用用紙をご用意していますので申し出いただければご郵送します。

\*いずれもお問い合わせは、編集部あるいは社会支援促進チームまでお気軽にご連絡ください。(mail@sawayakazaidan.or.jp)

表紙絵

はり絵・池田げんえい

「スイレンと雨がえる」



編集後記 ●「今風女子」は堀田家ゆかりの茶道師範、北風宗照さん。101歳の今も稽古に出かける忙しい毎日です(P4~)。

●「真っ直ぐに、30年」は、財団の創設期を支えた人たちについて鶴山理事が振り返りました(P10~)。●「活動の現場から」は、団地の改修工事が助け合い活動に発展したというユニークな現場。住民が得意なことを生かして、各部隊で活躍しています(P18~)。●「移住 悪くないですよ」は長野県佐久市から。雄大な自然と、現役時代とは違う関係性の仲間と囲まれて暮らす新地草倫さんです(P25~)。

助け合いを  
広げよう!

新  
ひとりごと

## 高橋 公



● 認定NPO法人

ふるさと回帰支援センター理事長  
2002年NPO法人ふるさと回帰支援  
センター設立、1972年から始めた神  
道夢想流杖道は5段の腕前。

ふるさと回帰運動は、都市と地方をつなぐ運動です。

団塊世代が2007年から順次、定年を迎えることから、  
この世代が定年後、

年金を糧にふるさとで暮らしたい希望を持っていることを知り、  
地方に帰れる仕組みを作ろうと2002年から始めたもの。

それが、いまや30歳前後の働き盛りが中心に。

移住相談は年間約4万5千件。

地方では過疎化・高齢化・少子化が加速度的に進む現在。

この運動が地域から日本を活性化させます。

## （あきお）6月号

通巻334号 2021年6月10日発行  
(毎月1回10日発行)

表紙絵 池田げんえい  
イラスト すずきひさこ  
福島康子  
細馬一紀

レイアウト 菊池ゆかり

印刷所 日本印刷株式会社

発行人 清水肇子  
発行元 公益財団法人さわやか福祉財団  
〒105-0011  
東京都港区芝公園2-6-8 日本女子会館7階  
Tel (03)5470-7751 Fax (03)5470-7755  
E-mail pr@sawayakazaidan.or.jp  
<https://www.sawayakazaidan.or.jp>  
Printed in Japan

あなたの気持ちを助け合いの力に活かしませんか？

# 「地域助け合い基金」で

## コロナ禍を乗り越えて共生社会へ

### こんなふうに役立っています！ 皆様のご寄付

#### コロナに負けず助け合い活動スタート



助け合う地域を目指し、外出支援、部屋の掃除等の有償ボランティア活動を開始

新潟県  
佐渡市

ボランティア活動  
保険加入費用、  
消耗品費等を助成

#### コロナ禍での高齢者と 子どものつながり

子どもたちが  
メッセージカードと  
青汁を高齢者にお届け



埼玉県  
三芳町

メッセージカード、高齢者への  
プレゼント代等を助成

#### 支援方法をオンラインまで拡大

コロナ禍で外国人支援  
をオンラインにまで広  
げたことにより、活動  
が継続・発展

山梨県  
中央市

オンライン授業  
の環境整備費用  
等を助成



### ご支援、ご寄付を どうぞよろしく願います。

※詳細は、本文35ページをご参照ください。



財団ホームページ内  
基金関連ページ



公益財団法人

さわやか福祉財団

